

迎ス敵ト激斗ヲ開始ス
守里附近ニ陣地ヲ占領セリ 独立砲隊一聯隊ハ軍砲兵隊長
ノ指揮ヲ股ニ独立根成ヲ四十四旅団長ノ指揮下ニ入ル
海軍根拠地隊ハ金城ノ根拠地見城向ノ地区ニ包圍スル
セリニトシアリ

機案作戰日誌

海軍部隊ハ喜屋武陣地ニ於テ陸軍ニ合流 戦斗スルキ軍計
畫ニ從ヒ五月下旬ハ秣地ニ防禦施設ヲ破壊シ喜屋武方
面ニ後退中ナリ其ノ退却時機軍ノ企圖ニ及ニ過早ナリ
知ルヤ司令官太田海軍少將ハ極々明快ニ秣地ニ陣地ニ
復歸セリハ既述ノ通りナリ
軍司令官ハ軍主力ノ退却完了シ海軍部隊ニカ掩護ノ任務ヲ完
遂セリ今日刻々被包圍ノ態勢ニ陥ルルアリ其ノ見既定ノ
一般計畫ニ從ヒ主陣地帯内へ後退命令ヲ發セリ
然レ太田少將ハ海軍部隊ニ既ニ包圍セリニ爲後退不可能ナリ

トシ最後迄ノ秣地ニ於テ戦ハシコトヲ懇請セリ 從來ノ行キ懸リテ
擲ニ作戰上ノ見地ヨリ觀察セバ海軍部隊ノ現陣地固平ハ敵
ノ那霸港及小磯飛行場ノ使用ヲ奪取スルト共ニ軍主力ニ対テ
敵ノ近接ニ攻東準備ヲ妨害スルハ効果アリ然レドモ全軍ノ
運命決定セリ今日無カキ海軍部隊ニ僅カク作戰ノ効果
ヲ期待シテ之ヲ軍主力指揮ノ間ニ孤立無援全滅セリハ情
上眞ニ忍カ能ハス依テ軍司令官ハ退却命令ヲ再電命
スル共ニ聲源共ニ下ニ懇切ク親書ヲ送付セリ
斯ル陸軍側ノ措置ニモ殆ク海軍側ノ決意ハ牢固トシテ
松久カキテ遂ニ自然ノ推移ニ委テ止テ得ガニ至レリ

六月七日

喜屋武附近ノ戦斗愈々激化ス
当初混成旅団長ハ喜屋武五三高地附近ノ陣地ハ前進陣地
トシテ守リテ是ナリトモ同陣地ノ価値ニ鑑ミ主陣地帯ノ一
部ト見做シテ之ヲ頑守スルニ決セリ

六月八日
敵ノ大部隊ハ東風平附近ニ南下シ先後逐次志太伯附近ヲ経テ
西方我が左翼方面ニ近接中ナリ
志太伯附近ニ在リ歩兵才三聯隊才大隊ハ主陣地内ニ後退セリ

六月九日
當部軍ハ地形上敵ノ重圧ハ才四師団左翼方面ニ指向セシ算
大ナリト判断シアリモ海軍部隊カ小嶽地ニ死守スルニ至リシ爲
才四師団正面未ダ敵ト觸接セザルニ混成旅団正面ノ戦斗敢ニ
激化シタル状況茲ニ海正面ニ對スル敵ノ策動活潑ナラカニ鑑ミ予
備兵団タル才六十二師団ニ命ジ其ノ大隊ヲ隨時混成旅団増加
シ得ル如ク待機セシム共ニ同方面ハ全力機動ヲ準備セシムナリ
我が左右兩翼ニ對シ敵ノ攻害時機カ先後セシハ前述ノ我が海軍
ノ小嶽地区死守ノ外敵ノ才四軍団ト海兵才三軍団ノ戦術ノ相
違ニ基因スルモノナラン即チ我が左翼ニ迫レル才四軍団カ海
邊戰術ヲ取ルニ及ビ我が左翼ヲ攻害スル敵海兵軍団カ十分
攻害準備ヲ整ヘ先後一舉ニ全縱深ヲ突破スル戰術ヲ採ルニ當リ

六月十日
混成旅団全正面敵ノ猛攻ヲ受ク
第六十四師団正面敵ハ漸次我が陣地ニ觸接シタリ
六月十一日

混成旅団正面敵ノ攻害重点ハ安里附近ニテ敵ノ戰術用法ハ首
里戰線當時比ニ大規模且大膽ナリ敵ハ主力ヲ以テ安里正面
ヲ猛攻スルト共ニ十數輛ヲ成ル戰車群ヲ以テ安里北側ニ高
地東側ヨリハ至極岳宇備院ノ地ニ進攻ス敵ハ此ノ進攻路ハ
軍カ予メテ地形判断上茲ニ旅団ノ左地區隊ニ特設カ六聯隊
カ配備ノ重点ヲ八重瀨岳山頂ニ保持セズ東林麓崖下ニ雲
キテ陣地ヲ占領シタリトシテ鑑ミ彼ノ物産伊祖附近ニ露呈
セシ其ト同様ノ弱兵ヲ認メ混成旅団ニ注意ヲ喚起シ思ハ
トニナルニ由テ敵ニ乘セラレタルハ遺憾ナリ斯クテ軍主陣地帯
内ノ二大據点ノ一タル八重瀨岳ノ基盤亀裂ヲ生ジ具志頭
宇備隊又全滅シ混成旅団ノ兩翼危急ニ瀕シ其ノ全陣
地頓ニ弱化ス
左小嶽海軍根據地隊司令官ヨリ左記要旨ノ最後ノ電報ヲ受領ス

大記

敵戰車群ハ我司令部洞窟ヲ攻東中ナリ根據地隊ハ今日
二三。五碎ス從前ノ厚誼ヲ謝シ貴軍ノ健斗ヲ祈ル

六月十二日

先十四師團正面ノ敵全線攻東ヲ開始ス
歩兵才三十二聯隊ノ陣地國吉台附近
戰斗最激烈ニテ中線諸
隊砲兵協同ニテ善戰シ敵甚大ニ損害ヲ与ヘツアリ
數日來混成旅團正面ニ激斗ヲ續ケ先十四師團方面ノ戰況頗
ル困難ト爲軍ニ同師團ハ戰ハズテ混成旅團ノ陣地ヲ突破ス
敵ノ爲北方面ヨリ攻東セラレテ潰滅スルニテ早ニ崩壞阻止ニ
力カレリ
與ニ率堵テ右翼正面ノ過早ニ崩壞阻止ニ力カレリ
首魁部ハ茲ニ於テ初メテ重荷ヲ下セノ感アリ
混成旅團ノ中央(与座仲産附近)及右翼(海岸面セル野原上)ノ戰
斗激烈ヲ極メ敵ハ時ニ依リ五車輛以上ノ戰車群ヲ以テ我ノ陣地ヲ
蹂躪ス更ニ旅團ハ其ノ左翼トノ連絡ヲ失シ八重瀨岳方面ノ状況ヲ

把握シテザルミナラス同方面ヲ強化スル餘カキテ、如シ
八重瀨岳失陷ニ因リ危險ヲ痛感ス才二十四師團及軍砲兵隊ヨリ之ヲ
保持強化ノ要求頻リナリ

軍ニ兩日來軍砲兵隊軍通信隊等ヨリ抽出セル少クモ中隊ノ臨編
歩兵部隊ヲ茲ニ今日並軍司令部控置ニテリ
才野戰築城隊ノ主
力ヲ混成旅團ニ增加シツルニモ狀况裝備劣弱訓練未熟ト部隊
才爲ニ戰斗加入上才三軍直ニ甚大ニ損害ヲ受テ所謂燒死ニ感
才六十二師團ノ独立歩兵才三六大隊令才十五大隊ヲ混成旅團長ノ
指揮下ニ入ルム

六月十三日

全線激斗ヲ續ク
先十四師團ノ歩兵才三十二聯隊正面ヲ堅不縮強化ニ目的ヲ以テ才
二線ニ控置セシ歩兵才三十二聯隊主力ヲ最左翼ノ眞宗里正面ニ推
進スル上其ノ最右翼ノ八重瀨岳方面ヨリ右側背ノ脅威ヲ除去
スル目的ヲ以テ搜索才三十四師團主力ヲ以テ該方面ニ攻東ヲ取
混成旅團ハ八重瀨岳方面ノ左地ニ隊トノ連絡ヲ回復シ得サル

ミナトス今や其ノ中央及右翼ノ保持ニ忙殺サレ左翼ヲ救フノ餘力
ナシ旅団長リ軍企圖ニ基キ新増加セリシテ
ヲ八重瀬岳ニ又独立歩兵才十三大隊モ
西翼ノ崩壊ヲ阻止ス如ク處置セリ
軍砲兵隊ハ各種砲約千門ヲ有スルモ
質極度ニ低下シ且上下左右觀砲間ノ
砲協同機ヲ失スル下多ク其ノ實力
軍ハ今ヤ強無裝回トナル全軍將兵
砲機銃等ノ集中中ヲ切齒拒腕シテ
的ニ自殺シテテテ痛憤ニ堪ヘズ
備隊ニ悉島軍團等ヨリ兵器彈藥ヲ
遠ク海洋ヲ隔テ孤立無援ノ重圍下
僅カニ中央部最後ノ努力ニ成ル
ヲ二三機分受領セシ過ヤク
國ニ基キ彈藥積載ト列舟ト
遂ニ軍主力陣地ヲ指呼ノ
敵掃海艇

六月十四日
沖ニ無事南航ニ来レモ遂ニ軍主力陣地ヲ指呼ノ
艦表車山ヲ受ケ各ウ海底ノ藻屑ト化シ去リ

混成旅団右翼ニ増加ヲ命ゼシテ
佐ノ指揮適切ニテ夜暗熾烈ナル敵ノ砲連下疲勞困憊
トナル部隊ナルニ拘テ山城附近ヨリ敵連ニ与座仲座南側ニ進出戦斗
ニ参加セリ然レトモ珊瑚山岸上據ルルキ陣地地物ヲ一日ニテ其戦力
大部ヲ喪失セリ独立歩兵才十五大隊ハ全軍ノ期待ニ拍リス其
進出緩漫ニ大隊長飯塚少佐ハ重病ヲ擔架上ヨリ指揮シテ
ト謂フニシテ与座南側ノ線ヲ越ヘテ前進スル模様ナシ才四師
團長ヨリ同大隊ノ攻東前進ヲ要求スル督促頻リナレ今ヤ八重
瀬岳確保ノ希望ハ放棄本ノ止ナキ狀況ナリ
第二十四師団主力正面リ概テ其ノ陣地ヲ確保シテ

六月十五日
混成旅団方面ニ於テハ左地區隊ニ引續キ白砲才一聯隊長ノ擔任
至中地區隊ノ消息ニ亦不明ナリ戦線既ニ統一ナラ諸隊ハ互里

仲座附近各據点ヲ據リ孤立死シテモ、如シ
第三十四師団ノ最右側翼ヲ仲座岳附近ヲ占領シテ歩兵第六十九
聯隊ハ八重瀨岳方面ヨリ絶へた側背ヲ脅威セリ戦力分散ス
ト共ニ動搖シテリガ遂ニ地形的ニ最モ堅固ト判断セルヲ仲座八重
瀨高地中腹間地区ヲ北方ヨリ突破セリニ至レリ
第六十二師団ハ第六十二師団全カヲ混成旅団正面ニ投入シ東方
正面ノ敵ニ最後ノ出血ヲ強要スルニ決セリ
第六十三師団長ハ軍命令ニ基キ歩兵第六十三旅団長中島中
將ヲシテ部下旅団長共ニ混成旅団ヲ併セ指揮シ東方正面ノ戦斗
ヲ擔任セシメ歩兵第六十四旅団ヲ真深平東南方地区ニ推進
スル如ク知照セリ師団司令部ハ依然山城ニ在リ

機密作戰日誌

一、混成旅団正面危急ヲ告グルヤ第六十二師団ヲ同方面カ線兵田
タラシメ極力八重瀨岳ニ連繫スル陣地ニ於テ戦斗セシムル軍ノ
方針ニ對シカ第六十二師団ハ混成旅団潰滅セバ軍司令部ハ摩文
仁高地ヨリ真深平附近カ第四師団司令部ニ撤退合流シ東方

正面ヨリ仲座岳ニ連繫スル陣地ニ於テ抵抗ヲ繼續シカ第六十二旅
団ハ山城ヲ中心トシ現配置ヲ以テ戦斗スルヲ可ク上ノ意見ヲ有シ
相当強硬ニ具申スル上言アリシモ軍司令部官ハ之ヲ採用セザリキ
二、軍ハ混成旅団カ高辛ツテ与仲座附近ヲ保持シ八重瀨岳
ハ奪取セシムルヲ雖モ戰勢浮動シタルニ乘ジカ第六十二師団ハ逐次
戦斗加入ノ要領ニ依リ極力現陣地帯ヲ於テ戦斗ヲ繼續セシム
ヲ希ムルモ諸般ノ情勢ハ漸次之ヲ不可能ナラシムルニ至レリ

六月十六日

混成旅団正面ニ於テハ其ノ主力カ在ル地区隊(独立混成第六十五聯隊)モ
遂ニ其ノ消息ヲ絶ツ至リ旅団司令部ハ一〇八高地ニ於テ直接
敵戦車群ノ攻害ヲ受ケツアリ
第六十二師団主力ノ東方機動ハ未熟ナル地形ニ於テ暗夜熾烈
ト砲撃下ニ運名トシテ進マズ師団ハ先ズ混成旅団ヲ掩
護下ニシテ仲座岳南方ノ線ニ態勢ヲ整ヘタル後半遭過戰的
攻東前進シ旧陣地帯ヲ奪還シ止ムヲ得ガハ現在ノ態勢
ノ線ニ於テ敵ヲ撃退セントスルニ在リ

六月十七日

混成旅団司令部及其直轄部隊ハ一〇八高地及与座仲座

附近ヲ頑守シテリ

中六十二師団主力ハ依然機動中ナリ

軍司令官ハ中六十二師団長三村ヲ摩又仁高地ニ前進ヲ命セリ

中六十四師団正面ニ於テハ步兵中六十九聯隊ハ与座ヲ奪取セリ

ヲ新垣附近ニ庄迫セラシ更ニ強大ナル敵ハ爲ニ步兵中六十二聯隊

ニ聯隊ハ中間地区ヲ突破セラシ全線方ニ崩壊状態トナレリ

此ノ日步兵中六十二聯隊本部ハ聯隊長以下殆全負七三高地ニ

於テ全滅ス

六月十八日

第六十三師団機動概不完了ス

步兵中六十三旅団座摩又仁根高地中間地区ニ步兵中六十四

旅団ハ真榮平東方地区ニ在リ

此ノ夜混成旅団司令部ハ摩又仁ニ後退ス

中六十四師団正面ニ於テハ步兵中六十九聯隊方面逐次崩壊スル共ニ歩

兵中六十二聯隊方面ヲ突破セシ敵戰車群ハ既ニ師団司令部所在地ニ具

榮平西北地区ニ侵入シテアリ

斯ノ時軍ハ摩又仁ヲ中心トシ軍司令部才字ニ師団軍砲兵隊

混成旅団各司令部ヲ基幹トシ集團トシ真榮平ヲ中心トシ才字

四師団司令部ヲ基幹トシ集團トシ漸次大キク分斷離隔セシメ

態勢トナレリ此ノ頃迄ニ衛生村圍ヲ始メ有元後方人員變々戰ハ

部隊ニ配屬セラレ敢テ中ナリ

六月十九日

軍司令官ハ軍運命愈々盡キタルヲ知リ大本營方面軍及肉保

各軍ニ対シ決別ノ電報ヲ発スルト共ニ隷下指揮下各部隊ニ

對シ左記西文ニ自取後ノ軍命令ヲ下達セリ

「全軍將兵ハ三月三日前ニ勇戰敢斗ニ依リ遺憾ナク軍任務ヲ遂

行ニ得タルハ同慶ノ至リナリ然レトモ今ヤ刀折シ矢盡キ軍運命

旦夕ニ迫ル既ニ部隊間ノ通信連絡ハ杜絶セテ軍司令部官ノ

指揮に至難トナレリ。爾今各部隊ハ各局地ニ在リ生存者中ノ上級者
之ヲ指揮シ最後迄敢斗キ終久ハ大義ニ生ケルニ
此ノ日軍司令官幕僚全員僅ニ残ル。罐詰類ハ若干ノ酒ヲ以テ
決別ノ宴ヲ張ル折リカラ。摩又仁東方約千五百米ノ稜線上ニ敵
戦車十數輛出現。戦車砲司令部洞窟附近ニ集中ス
此ノ夜參謀大司令部將兵約千名大本營連絡或ハ遊軍戰
任務ヲ受ケテ出動ス
歩兵九中九聯隊長及工兵九中四聯隊長新垣ニ於テ戰死ト報テ
六月二十日

摩又仁ノ中心トシテ周圍千五百米ノ圈内熾烈ナル砲撃ノ内戦車砲
機銃小銃等又熾ニシテ愈々戦斗ハ最後の段階トナリ
九中方面軍司令官ヨリ九中軍司令官ニ對シテ別紙ヲ一紙
志狀授与シ電報アリ
六月二十一日

九中四師團司令部ト徒歩信令ニ依リ最後連絡ヲ爲ス

摩又仁高地周圍ニ在リ九中六十二師團混成旅團軍砲兵隊各司令部
ト間ニ依然徒歩連絡ヲ續ケタリ
各司令部毎ニ玉碎スルニ決ス
昨二十日敵手ニ入ルモ摩又仁部落ヲ司令部衛兵一小隊ヲ以テ奪
還ス。此ノ日陸軍大臣參謀總長ヲ司令部官宛テ別電報
乘ル右電報ニ依リ米軍司令官「シモン」バフク「」將軍十七日
壁附近ニ於テ戰死セリト知ル

六月二十日

正午頃摩又仁部落ノ銃声止ム同地守備ノ衛兵全滅セリ如
時餘ニ司令部洞窟重砲道上山頂衛兵敵ニ急襲セリヲ悉
ク殲テ敵ノ爆雷手榴彈洞窟内ニ落下シ參謀長室附近ニ在
リテ將兵十數名死傷ス凄愴ノ氣洞窟ニ溢ル
軍砲兵隊司令部ハ既ニ昨夜總員漸ク減ル報アリ
軍司令部ハ本部司令部生存者ヲ以テ八九高地山頂ヲ占

還明平三日黎明三期に全員摩又仁部港方向に突進此向
軍司令官參謀長は山頂に於て自決スルに決ス
司令官部將兵は予定ノ如ク十七夜一月未夕上りて海
岸に面スル坑道ヨリ山頂に向て相互に決別スル斷崖ヲ攀
登シ突進ス
突進功ヲ奏セズ

依ッテ予定ヲ変更シ軍司令官參謀長は八月將ニテ團
ニ設セントスル頃坑道に外海面ニ屹立スル斷崖上ヨリ於
古武士ノ如ク自決ニ終ラヌ
時ニ昭和二十年六月二十三日四時三十分ナリ

B 国頭支隊 戰鬥 (別紙要圖第七参照)

一 遊東戰轉移狀況

一般ノ狀況

四月一日嘉手納海岸ニ上陸スル米海兵才ニ軍團ハ一部ヲ以テ北中飛行
場地ニ在リシ特設ホ一聯隊並ニ恩納岳ヲ根拠トスル才四遊東隊
ヲ攻撃スルト共ニ主力ヲ以テ陸路名護方面ニ北上更ニ之ニ策應スルカ
如ク其ノ一部ハ四月七日名護灣ニ上陸シ四月九日頃ハ本部半島ニ在ル
国頭支隊主力ハ完全ニ包圍サレルニ至リ

第四遊東隊ノ狀況

敵嘉手納海岸ニ上陸スルヤ直チニ中頭地区ニ對スル遊東戰ヲ企圖
シ四月一日夜恩納岳ヨリ石川岳ニ前進ス馬ノ高地ニ潰走シ米タル
特設第一聯隊及海軍部隊ト共ニ總員約二千敵ノ攻東ヲ受ケ
目的ヲ達セズ四月六日恩納岳ニ復還シ之ヲ死守ス

第三遊東隊ノ狀況

「夕三」岳ヲ根據トシ四月七日頃ヨリ漸次其周辺地区ニ對シ遊軍戦開始ス

国頭支隊主力ノ状況

四月九日二〇〇〇頃ノオ一線ハ安和伊豆線ニ進出ス
十三日頃ヨリ熾烈な砲爆ト相俟テテ敵地上部隊ノ攻果不格化シ
十四日八重岳周辺ニ支隊主力ハ完全ニ包圍セラル敵ノ攻果ハ二七〇高地
方面ニ於テ特ニ猛烈ニシテ先ツ該方面ヨリ陣地ヲ突破進入セラル茲ニ
於テ支隊長ハ十五日夜現陣地ヲ放棄シ伊豆線附近ヲ経テ「夕三」岳ニ
転進シ遊軍戦ニ転移スルニ決ス支隊主力ハ十八日頃ヨリ逐次「夕三」岳ニ
到着ニ至リ日頃ニ約四千ノ兵力ヲ集結ニテ三日一應ノ防禦準備ヲ完了シ
敵ハ二十三日日頃ニ包圍ニ能ハシラ完成ニテ四月日頃中砲爆連ラ加ヘ
ツ、羽根地名附近正面ヨリ攻果ニ来タル此ノ夜支隊主力ハ国頭北部
地区ニ分散転進シ二十五日「夕三」岳ハ敵ノ占領スルコトナル

伊江島守備隊ノ状況

敵ハ十五日伊江島西海岸ニ上陸同方面守備ヲ擔任シアリシ田村大尉
ノ指揮ニ飛行情場設定部隊ヲ圧迫シテ一東ニ島ノ中部ハ二高
地ノ線ニ進出更ニ十六日伊江島東南岸ニ上陸城山ヲ中トスル
守備隊主力(オニ歩兵隊オ一大隊)ノ陣地ヲ西方及南方ヨリ猛攻テ
加フ同守備隊ハ勇兵克ク善戦敢斗セモ十九日夜守備隊長
佐藤少佐逆襲ヲ為成山麓ヲ前進中戦死シ部隊ノ戦力又此ノ頃迄ニ
概ニ盡キ二十日伊江島ハ完全ニ敵手ニ入り

機密戦作日誌

一軍司令部ト国頭支隊トノ通信連絡ハ四月十五日名護東方地区ニ転進シ
遊軍戦ニ転移スルノ旨ヲ無電モ報テラ最右トシテ杜絶ニ爾後同支隊
主力ハ勿論各遊軍隊伊江島守備隊ノ状況ハ軍司令部ニ全然不明ナリ
前述諸状況ハ五月下旬オニ遊軍隊長ノ派遣セシ連絡者ノ到着迄ニ
之ニ端緒ヲ得テ軍ヨリ派遣セシ浦田少尉以下ノ挺進連絡班ニ依リ逐次
判明セリ

二軍ハ作戦開始前ニ於テハ敵ハ直チニ伊江島ニ上陸スルヤ或ハ本部半島
ヲ攻略シタル後伊江島ヲ攻果スルヤ或ハ西方面固持ニ遊攻果ニ来タル
ヤ等ノ場合ヲ考慮シテ伊江島ニ上陸スルノ優越セシ戦力ヲ待ミ一撃ヲニ
大航空根據地タル伊江島ニ上陸スル算大ナリト判断セリ
依ッテ本部半島ノ支隊主力陣地内ニハ独立重砲オ百大隊ノ一少隊
(十五加ニ)及海軍十加ニヲ配置シ之ニ依リ敵ノ伊江島ニ上陸茲ニ爾後
ニ於ケル同飛行場ノ使用ヲ防果スル計畫ヲラシモ敵ガ慎重ニ先ス本部
半島ニ上陸セニ為是等長射程砲ハ其ノ威力ヲ發揮スルニナカリキ
然レドモ軍トシテハ国頭支隊ノ戰略的配置ニ依リ敵ノ伊江島攻略ヲ

疎延セシタルヲ以テ同支隊、主任務タル「鬼ヶテ」永ク敵ヲシテ伊江島
飛行場ヲ使用セシタルノ目的ヲ達セリト觀察ニ得バシ

二、遊軍戦艦移後ノ状況(四月二十日)

石川岳ニ後退國頭支隊長、指揮下ニ入レル特設オ一聯隊(真正聯隊ハ
通信連絡其、他ノ関係上國頭支隊長ノ掌握下ニ入りテラス)ハオ四遊
軍隊ト相協合シ石川岳恩納岳、南ヲ往来シテ遊軍戦ヲ續行シ
終戦ニ至ルソ、南聯隊長青柳中佐七日戦死ス四月二十四日夜「分三」岳ヲ
徹ニ國頭北部地区ニ分散避退セル國頭支隊長ハ爾後概ネ統制
ヲ行動ニ遊軍戦、効果見ルベキモノナシ第四遊軍隊ハ四月六日石川岳
ヨリ恩納岳ニ後退四月二十日ヨリ五月一日、南敵ノ攻惠受ケタルモ克ク
之ヲ保持シテ遊軍戦ヲ續行シテ五月二日ヨリ再ニ敵ヲ攻惠マ受
ケ六月六日久志岳ニ後退ス爾後依然ト規模、遊軍戦ヲ續行シテ
終戦ニ至ルオニ遊軍隊ハ敵撤退後南ニシテ岳ニ據リ其ノ周辺地区ニ對
シ小規模ノ遊軍戦ヲ稍々活発ニ續行シ敵宿營地、米糶交通
妨害ニ任ズ相当ノ効果ヲ收メタリ敵海兵オ一軍団、主力ハ國頭地
区、掃蕩概成スルヤ四月下旬ヨリ遂次島尻方面ニ南下シテ主力戰艦

ニ参加シ爾後ハ我が海軍存部隊ニ對シ軍ニ警戒的措置ヲ執ルニ止メタルモ、
如シ

C、慶良間方面ノ戦斗

慶良間郡島ニ展開セシ海上挺進オ一及オニ戦隊ハオ一船舶団長大野大佐
、同方面巡視中三月二十日、米艦隊攻惠スルトコトナレリ、都在座南味島
オ一戦隊在阿嘉島オニ戦隊ハ三月二十六日在渡嘉敷島オニ戦隊ハ初立
ニ之日夫々有力ヲ敵海兵部隊、島ニ慶良間灣岸ヨリ上陸攻惠セラル諸隊ハ
之ヲ海上ニ邀惠スルノ旨ヲリ又船舶団長ノ全戦隊ヲ率ヒテ沖繩本島ニ
転進スルト人止國(独断)モヤシク水泡ト歸シ各戦隊ハ天々山トニ圧迫セラ
商塞ニテ終戦ニ及ブ止ムヲ得ガレニ至リ、軍司令部ト右諸部隊ト通信
連絡ハ三月二十七日以後杜絶シ爾後白トシテ状況不明カラス玉碎ト推定セラ
レリ三月二十五日、向一部人員、本島脱出ニ依リ状況判明セリ、稲垣小尉ニ
通信機由ラ附テ渡嘉敷島ニ救遺スルニ及ビ連絡回復シ同方面ノ状
況ハ概ネ軍司令部ニ承知スルトコトナレリ

D、海上戦斗

一、海上挺進隊ノ運用

軍海上挺身隊一カ至カ三戦隊、慶良間群島ニ海上挺身カニテハ乃至第
 二九戦隊ヲ神速本島ニ進陣地帯内配置ニ敵上陸ハ初動時隨
 處々其主カヲ機動集中ニテ敵輸送船ヲ攻襲一舉ニ破滅的効果ヲ
 ホルラ一般方針トセルハ作戦準備ノ項ニ記述セテ通リナリ
 天勝的用法方針ハ以テ、如何ナクモ捷ク作戦ヨリ天号作戦ハ、較移即チ
 軍任務ヲ決戦ヨリ持久ニ變更シテ航空部隊作戦方針モ亦持久消耗的陸
 格頭者トスニ及ビ作戦動亮直前ニ於テ、軍首的部ニ意何ハ漸次持久
 消耗主義ニ傾ケリ、偶々作戦勢頭在慶良間、三、戦隊ヲ失フニ及ビ天勝的
 用法ハ完全ニ断念セラル得ガレムニユリ茲ニ於テ軍司令官ハ持久用法ニ
 決シ小規模ノ出襲ヲラ持續的ニ実行シテ敵海上艦艇ノ行動ヲ制シ
 陸上作戰ヲ容易テラシムトセリ

二、海上挺身戦隊攻襲ノ状況

軍ハ新方針ニ基キ一部海上挺身隊ヲ二十七戦隊(中队欠)ヲ以テ中域海
 方面兩針ノ在本島兵力ヲ以テ西海面特ニ嘉手納沖方面ノ敵艦艇ヲ
 大々好機ヲ捉ヘテ攻襲ラセシメタリ攻襲ハ四月下旬ヨリ開始セラレ五月二日
 攻勢ニ於ケル遂ニ上陸策心ヲ以テ最高潮ニ達シ五月下旬首里戦線後
 退ノ頃迄継続セリ作戦開始直前係有セシ出動可能舟艇數約二百隻
 (オキナ戦隊ハ一中隊)ニ戰場到着主力ハ乗船沈没ノ爲ニ美大島帯留
 出襲命中ヤリト推定セラルモノ百ニ四隻判定セル事沈敵艦艇數経巡以下ノ數ナリ

各戦隊別推定出襲命中數五ノ如シ

- 第三十六戦隊 一六 (四三八回海面ニ出動)
- 第三十七戦隊 二四
- 第三十八戦隊 一六
- 第三十九戦隊 一六

出動可能數ハ出襲命中數ト差ハ待機中ニ於ケル砲爆ノ被害出襲
 途中ニ於ケル損害茲ニ状況不明ニ基キ圖スルモノナリ
 攻襲精神旺盛ナル各戦隊ハ攻襲用舟艇ヲ使用テ盡シタル後ニ於テテ
 所在剩餘ヲ利用シテ爆雷ヲ搭載シテ攻襲ヲ續行セリ判定事況
 敵ハ其攻襲ハ暗殺必死のニ実行セラレ確認シテ法頗ル困難ナリニ
 爲シテ正確ヲ保シ對シテ元来挺身攻襲ノ成果ニ就テハ其ノ方法頗
 ル原始的ナル爲軍首腦部ハ勿論実行擔任者ハ難多ク不疑惑ヲ
 有シテリトコトニテ事實的戰果ハ中央部ノ努力ト熱意副
 ハナルモノアリキ
 三、其ノ他ノ方法ヲ以テ敵海上艦艇ニ対シテ攻襲
 一、海軍根據地隊ハ尤ノ如ク敵艦艇ヲ攻襲セリ

不運天老根據地トスル小型潜水艦魚雷攻撃ニ任ズル既述艦隊

敵ノ上陸前、既ニ根據地ニ於テ砲爆ニ依リ不損害ヲ受ケ以テ四月下旬
之ニ上陸セラルレ活動不能トナレモ、潜水艦ハ優良商方面ニ進出シテ
敵ヲ攻撃セリ

○海軍砲台ハ当初軍作戦方針ニ基キ沈黙ニ主義ヲ採レルモ作戦後
半ニ於テハ好目標ヲ捉ヘテ之ヲ攻撃ニ相当、成果ヲ收メタリ

八本島周辺ノ敷設セシ機軸水雷ハ敵ニ相当、損害ヲ與ヘタリ

二、海岸ニ施設セシ魚雷発射機関(中城湾岸與那原ニ於テ、如キ)
ハ攻撃實施スルニ至ラザリキ

三、陸軍部隊ノ一部モ作戦^{未明}特ニ海岸ニ近接スル敵十舟艇ヲ攻撃
セシトアリキモ戦果見ルキモナシ

E. 沖繩周辺ニ於ケル我が航空部隊ノ活動

一、軍ヨリ觀タル航空作戦ノ要領

天号作戦計畫ニ其エテ張リ付ケ總特攻主義ハ作戦準備ノ頃ニ記述
セル如ク南西諸島ニ圍スル限リ展回機ヲ失シ張リ付ケ、企圖ハ盡^併
ニ歸セリ地面ノ總特攻主義ハ忠實ニ實行セラレモ其ノ兵力ノ運用
用集中^的ヲ勝^的ヲス^持久^{消耗}主義ニ終始セリ

航空作戦上、我が戦術的^優位ヲ時ニ^敵上陸軍ヲ海^上ニ於テ^零
ニ裏滅セテスル航空部隊ノ理想ハ^易變ト化シ其ノ本格的活動
ハ四月四日敵上陸後開始セラレ滿後連日十数機ヲ至數十機ヲ

以テ本島周辺ニ^集結スル敵機ヲ通^シ無^ク沖繩近海ニ到達^必
死^實果^ヲ繼續セリ^終始^ヲ通^シ無^ク沖繩近海ニ到達^必
連^シテ^機敵^一千^五百^機ヲ下^ラス^海上^特攻^主義^徹底^セル^遂ニ^機

七地上戦斗ニ直接参加スルモノナカリキ

二、航空作戦、地上戦斗ニ及ビタル影響

純作戦的見地より判断ニ我が航空部隊、作戦ハ地上作戦ニ大ナル影響ナリ、敵陸海空三軍ハ若意、如ク沖縄攻略戦ヲ遂行セリ、我が航空部隊ハ海上戦果(ホ六ノ海上攻果ヲ含ム)ハ一應尤ノ如ク統計ニ表シ居ルモ戦果確認ニ法頗ル不確実ニシテ實際ノ戦果ハ遂ニ對シテ沖縄固守ニ行動スル敵艦艇ノ数ハ我が空襲ニ依リ殆増減セザリキ

大破炎上
 A-11
 aA-13~14
 B-5
 C-29
 D-100
 T-82
 不他-114
 他-35
 計 389
 390

中小破
 A-6~7
 aA-5
 B-14
 C-34
 D-19
 T-34
 不他-2
 計 230
 231

計總
 619
 621

純作戦上ノ一般觀察以上ノ如ク雖必死特攻ニ任ジテ幾多忠勇無比ナル戦友ノ尊キ犠牲的行動ニ依リ地上作戦軍ノ物心両面上得タル支援ノ断テ過少評價スベカラズ其ノ主要ナルモノヲ擧グムルハ九記ノ如ク

一、全軍環視ノ裡幾方キ、火光ニ染マル防空陣幕ニ悉ク突入シ特攻機ノ壯烈鬼人ヲ思ワシムル光景ハ將兵ノ志氣ヲ鼓舞シ見我等ハ孤ヲズル自信力ヲ維持スルニ絶大ノ効果アリタリ

二、特攻機ノ攻襲待機ハ黎明薄暮及白明、空ニ選定セラレタリ從ツテ敵艦艇ハ晝間ニ於テ行動ハ自由ナクモ日没直前頃ヨリ翌日出直後頃迄間ハ我が特攻機ニ因リ損害ヲ極減セキ爲其ノ主力(有カナル一部ハ夜間ト雖沿岸ニ残留ニ不断ノ猛砲撃ヲ繼續ス)ハ距岸三四十軒ノ沖合ニ避退シ通常東国島附近慶良間湾内及其西方海面漆川沖ニ防空陣ヲ形成スルヲ常トセリ之ガ爲薄暮ヨリ黎明ニ至ル由ハ我が地上部隊兵力機動部署、変更整理兼城、増強補南軍需品、補給輸送等ヲ可能容易ナラシメ地上作戦ニ貢獻セリ

三、地上作戦、航空作戦ニ及ミタル影響

一、沖縄本島及伊江島、各飛行場ヲ鬼ナテ永ク敵ニ使用セザル件ニ就テハ中興部及航空部隊、専ラ強烈ニシテ作戦ノ綜合的効果ヲ無想ニシテ遂ニ之ヲ破壊セシムル、主因ヲ爲セリ關係各方面、如何ナル論難ヲ